

新図書館での「名取らしい」市民協働を探る ライブラリーミーティング

日 時：平成29年9月18日（月）13：00～15：30

場 所：文化会館（小ホール）

参加者：27名（市・教育委員会・図書館事務局は人数に含まず）

山田司郎市長、瀧澤信雄教育長、五十嵐竹美生涯学習課長、
佐々木賢一生涯学習課長補佐、
岡本真 新名取市図書館建設アドバイザー、
鎌倉幸子ARG、柴崎悦子図書館長ほか
事務局2名

1、はじめに

①これまでのライブラリーミーティングの開催状況（柴崎館長）

- ・平成26年9月 ヤングセッション
高校生・大学生から新図書館について意見徴集
- ・平成27年2月 出張ライブラリーミーティング
市内19箇所です市民向け開催。（新図書館計画・市民からの要望徴集・図書館の説明）
- ・平成29年9月 新図書館での「名取らしい」市民協働を探る
ライブラリーミーティング
図書館のサポート、応援団の立ち上げを意識した、ワークショップの開催。

②あいさつ（山田市長）

図書館を含めて、駅前の再開発ビルが順調に進んでいて、来年12月グランド・オープンができないかということで進めています。

今回の図書館は名取の知的財産ということでもあり、ぜひ情報発信の拠点にしたいと思います。また、いろいろな人が集って、憩いの場、交流の場の拠点として考えています。3つ目は、このように皆さんがお集まりいただいておりますが、市民協働の拠点にしたいと思っています。

今、いろいろな構想がありますが、読書手帳、自分が読んだ履歴が分かるようになるとか、ビブリオバトルという自分達を読んだ本が面白かったよ、と言い合い、どんな本を一番読みたいか決めるといったことなど考えています。

いずれ、冒頭で申し上げましたとおり、ぜひ、皆さんに応援団として新しい図書館を支えていただいて、この名取の地域づくり、繋がりづくり、盛り上げていただけたらと思います。

今日の会が有意義になりますことを期待しています。よろしくお願いいたします。

2、本日のワークショップについて（説明）ファシリテーター：岡本真アドバイザー

①ライブラリーミーティングのテーマ設定について

平成30年12月新図書館・公民館開館、名取駅周辺のまちづくりのあり方が変わってきます。時代が変わっていく中で、市民の皆さんに今回、図書館をただ市が運営していく、そして市民の皆さんがただサービスを受けていく、それだけの関係で終わらせるのはもったいないのではないかと。これは名取らしいことではないのではないかと。といいますのも、名取市と私の繋がり、出会いを振り返えますと、小学6年生の頃の訪問地であること。そして東日本大震災の支援活動（現在の建物）を2011年4月29日の名取市図書館に立ち寄り、現状や実情を伺って支援を6年間。前半はひとりのボランティアとして関わり、後半は新図書館を作る計画の中でアドバイザーとして招へいしていただいています。

この6年間、会社の仕事として主に図書館、東北各地では震災復興がらみで関わりがあります。主に南三陸町、福島県須賀川市、新地町で、その中で比較するわけではないのですが、名取市に通う中で非常に感じたのは、このまちには、このまちらしさがある。それはどういうことかと言いますと、今ある仮設の2つの図書館の中で、主にどんぐり子ども図書室を作るうえで関わったのですが、支援者を探す。設計者や資材や資金を提供していただける人を探す。そして名取市の皆さんを通して感じたのは「これは市役所がやるから市役所に任せる」のではなく、「これは自分たちのことだから」という気持ち。市内、県外は遠くの支援者は、宮崎から来ていただいた人もいた中で、その支援の力も借りつつも「自分たちで頑張って良くしていこう」という気持ちがあると感じました。今回、この文脈も踏まえ、行政サービスだから、ただサービスを受け止めればいいのではなく、この6年間、大きな苦難ではありましたが、現在の仮設図書館で復活し、ここまで至る中で、せっかくできた、みなさんと役所との関係、市民協働の形や流れや思いをうまく次の世代に受け継ぐかたちを作っていけたらと思います。本日から始まるワークショップは、そのためには一番良いか、どんな形が良いのか、市民、役所、図書館考えていくことを目的としています。

②市民協働とは

「協働」そして「自治」
～現状としての「協働」と「自治」の現状
自治 協働 行政
キーワードとしての「持続可能性」

市民協働は、どのようなあり方が望ましいか、大体が、どこの役所でも市民と行政

を進めていく、地域と進めていくことが当たり前となっています。

目的、ゴールが一緒なので進めていく。協働は大きなキーワードとなっているが、歴史的時間軸で見ると、少し変わって来てしまった。そもそも、市民協働という言葉を使わなくても、名取市あるいは、増田という地域を見ていくと大概は自分たちで担っていました。しかし、1970年～1980年にかけて大きな変化が訪れます。高度経済成長が大きく最後に花開いた時期、どちらかというところ、自治や協働ではなく、行政・サービスという言葉が一般的に使われるようになる。つまり、税金さえ払えば行政大概のものは何でもやってくれる、対応してくれるというのが80年代に大きな頂点に向かえます。一概に問題とは言えませんが、千葉県松戸市、当時松本市長（マツモトドラックストアの創業者）は、「すぐやる課」を作り、市民の皆様の要望に対して即座に対応する。すぐやる課が直接やるのではなく、すぐやる課がヒアリングして、適切な課に対してその仕事をつなぐ、引き渡すという課で、最近は一ストップサービスとされています。よかった部分は「お役所仕事」と言われていることが何でも迅速に対応するようになりました。しかし、現在の課題としては「役所に言えばなんとかなる」という文化を作ってしまった。その結果、例えば行政職員の人数が増えた、自治体に見合わないような大きな役所組織を作り出してしまいました。市民の意識としても、些細なことを役所に電話をするようになってしまいました。

例えば、私は横浜の田舎に住んでいますが、子どもの頃はザリガニ釣りをするなど自然が豊かでした。今では、カラス一羽が死んでいても役所に何とかしてくれと電話をします。確かに、カラスが十羽死んでいたら問題で事件です。連絡が必要です。しかし、かつての暮らしを考えると、例えばカラスが一羽死んでいたら、裏山に埋めていました。住民たちがちゃんと処理をしていました。ところで、行政サービスが行きすぎた結果、何でも行政は、大きな見直しが入っています。ひとつは、そんなことをしていると、行政が持たない、何故ならば、市民皆さんの強い要望があって今行われていることですが、行政改革で肥大化しすぎた職員数を減らす、という政策が全国一律で行われるようになりました。その結果、公務員の数が凄まじい勢いで減らされています。職員数が減ったことが良かったか悪かったかは実は微妙なことで、東日本大震災で、沢山の職員が亡くなった結果、自治が崩壊した陸前高田市、南三陸町を見れば明らかことです。ただ、バランスをとりながら、今緩やかに行政機構を小さくしていこう、何故ならば、人口が減っているのです。維持ができません。その結果、今求められていることは、かつて当たり前に行われていた協働、あるいは自治。自分たちのことは自分たちで、何でもかんでも役所を頼りにするのは辞めましょう。何故ならば、その自治体が持たない、その自治体が破綻しかねない。かつて、事実上破綻した自治体があります。夕張市です。今でも自治体の決定権がほぼなく、何かするには国にお伺いをたてなければならない。自治体が

破綻するということはそういうことで、地方自治がないという状態。それは、実は夕張市だけでなく、多くの自治体が同じように陥ることが強く指摘されています。そして、東北地方は現実としてかなり危険度が高いと震災前から見られています。名取市の場合、人口もあり増えていて、豊かな都市です。当座心配することではありません。しかし、2040年までには必ず人口が減ります。かつ、ほとんどの自治体で減ります。人口が減る理由は、若い子が減る、寿命が延びることで医療費負担が増えます。そのような中で地域、まちを破綻させないため「自分たちでできることは自分たちで、なるべくやりましょうね」ということで、今回のライブラリーミーティングは、新図書館ができるにあたって、どんなことが協働で、一緒にできるか考えていきましょう。ということが、大きな前提にあります。また、ここまでのお話は、お互いごまかしや綺麗事での協働ではありません。名取は、他の自治体に比べたら余裕があります。余裕があるからこそ、先に手を打つ必要があります。余裕がなくなってからでは、間に合いません。将来を見据えて、元気があるうちに、若い方が沢山いるうちに、20年後、30年後、50年後に続くような名取のまちのあり方、今日この場があると、考えていただけたらと思います。

③市民協働のあり方について

さて、協働の自治を確立していく、取り戻すには何が必要かといいますと、二つが必要と言われています。オーナーシップ、イコールパートナーシップです。

オーナーシップ 「自分たちごと」としての意識 「私たちごと」としての行動 まちのこと、図書館のことを人任せにしない。

市役所、市長の持ち物ではなく、真の持ち主は、市民、皆さんです。

公共の施設は皆さんの物です。それは、みなさんの税金で維持されているからです。自分達の物として意識していくことが求められます。これは多くの自治体では、公共物を作るときには、基本は借金をして作ります。将来において払っていく形で作ります。また、建てるときかけられたお金以外に、公共施設は約50年使い続けるための維持管理のお金を払い続けます。これは、子どもや孫、名取に住む将来の市民のために自分たちの行動が求められています。

イコールパートナーシップ
代表・代行としての政治と行政
本来的には完全な対等性

そして、もう一つ、ワークショップの中で「こんなことをしたい」「あんなことをやりたい」について、みんなで考えて行きます。その中で、ひとつこう考えてください。お願いするのはやめましょう。つまり「市長さんこうしてください」、「教育長さんこうしてください」ではなく、市長も教育長も皆さんと同じ名取の市民です。この公共施設をどう維持管理していくかを考えるのは、市民と役所が対等ということです。あるいは議員さんと対等です。市長や議員は選挙で皆さんが選んだ代表や代行です。皆さんに成り代わって責任を持って市政を運営する役割を負ってはいますが、皆さんがそれを全てフリーハンドで任せるのは逆に、有権者として極めて無責任な行為です。そうではなく「市民として私はこうしたい、こうすべきだと、思う」ということを話し合いです。特に、皆さんに成り代わって行政サービスを回している代理の市役所におもねることはなく、遠慮なく、そして、市長や議員さんは代表の立場ではありますが、イコール偉いを意味しているわけではなく、対等です。お願いは対等ではありません。立場はあれど、対等に話し合う、どちらかという、私たちはこれをします。市はこれをお願いします、どちらかという、ギブ&テイクで考え、意識していただけたらと思います。

④図書館における市民協働（事例紹介）

図書館の話しに、具体的に移して行きたいと思います。

「協働」そして「自治」
-新図書館における「協働」と「自治」
伝統的な仕組みとしての「図書館協議会」
▶図書館協議会は、図書館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、図書館奉仕につき、館長に対して意見を述べる期間とする（図書館法第14条）
▶名取市図書館にも設置
同じく伝統的な仕組みとしての「フレンズ」組織
▶アメリカにおける“Library friends”に源流
▶国内でも多くの自治体に存在
▶協働を前提にした自律的な第三者団体
最近の流れとしての「サポーター」活動
▶図書館を財政的に支援する団体（「雑誌スポンサー」制度等）
▶市民以外の利用者カード発行（「ふるさと納税」「観光誘客政策」等）
▶積極的な連携・回遊活動（利用者カード提示によるサービス提供）

図書館の協働的、自治的な取組みは、図書館の世界では実は当たり前だったりします。例えば、図書館協議会です。名取市にも設置されています。図書館法の中に述べられて

いることですが、図書館の管理運営のあり方について、基本的には市民の皆さんが、中心となって協議をする。そして、館長からのお尋ねに対して、協議会として意見を出す。つまり、図書館のあり方について、市民の皆さんが意見を述べる場がきちんとある。形骸化されている図書館もある中で、名取市の場合はきちんと機能していると言って良いと思います。実際、新名取市図書館施設整備検討委員会が定例的に開催され本日、このミーティングに参加。そして、この新名取市図書館施設整備検討委員会には、図書館協議会委員長も入られ、新しい図書館がどうあるべきかを常に意見を反映しています。

その他として、アメリカでは、ライブラリーフレンズ、図書館を応援するボランティア団体が組織されているというのが、ごくごく一般的です。アメリカの公共図書館では、ライブラリーフレンズが無い方がめずらしいと言って良いでしょう。そして、日本で言えば最近増えてきているのが、サポーターという活動です。図書館の応援団です。サポーターという言い方は、Jリーグが普及してから広まった言い方ですが、サッカーの場合は12番目の選手がある。どこのJリーグのクラブチームでも背番号12番目は欠番にしておく。なぜならば、応援してくれているサポーターの番号だからという考えがあります。そのような考え方に刺激されて、図書館の様々な点でサポートするという活動が最近かなり強くなってきています。

この一例を挙げますと、協働や自治において、おそらく全国三千館以上ある図書館の中でもっとも良い形になっているのは、佐賀県伊万里市の事例ではないかと思えます。ここからだ、想像しにくい場所かと思えます。九州北部のかなり西にあるまちで、有名な所と言えば、焼き物、伊万里焼の産地です。この伊万里市では22年前に新しい図書館ができました。その時に、図書館フレンズ伊万里という、市民主体で立ち上がり現在まで活動を継続しています。伊万里の場合は35年前ほどに、市民の間で新しい図書館を作ろうと活動がはじまり、それから10年間継続して活動が行われ市全体に機運が高まり、ついに図書館が誕生しました。それを受けて新図書館を作る会は衣替えをして、フレンズ伊万里ができたわけです。このフレンズ伊万里の活動は、緑豊かな図書館ですが美化活動として、基本的に業者に委託せず自分達で行います。そんな所を自分達の税金を使うのではなく自分達で手入れをしよう。何故ならば、図書館は自分達の書斎だから。わざわざ外注する必要はなく、自分達で行えば良いじゃないか。伊万里市は焼き物のまちだけでなく、漁港、農業のまちでもあります。そういった意味で、地域の方々は緑の手入れは職業上訳もなく出来てしまいます。そして年末の大掃除も屋根に登るような作業も大概市民が行なっています。これは地味なことではありますが、重要なことでもあり、年間の清掃を外部に委託したら数百万円かかります。そこでお金を使うのではなく市民みんな考えて対処しようという考えがあります。名取市が新しい図書館がきたら、他の自治体、行政や議員の視察でお見えになると思います。そのような対応も

伊万里市の場合は市民自ら対応をします。

次に、福井県鯖江市です。メガネのフレーム作りで有名なまちです。メガネのフレームにおいては国内9割のシェアです。鯖江市の場合は、鯖江市図書館友の会があります。この友の会は、図書館内にあるカフェの経営を受託し、さらにはそのコナを使い図書館と協力して、月1回ライブラリーカフェというイベントを開催しています。イベントの内容は、全国的に有名というよりは、福井の中では是非知っておくべき企業の人や、漆器作家などを招いて、みんなで話を聞いてコーヒーを飲みながら語らうことを市民主体で行なっています。年間150回位開催しています。そしてすごいことは、前々館長から言われたことが印象に残っています。「最近、福井大学で福井の商工会議所で呼ばれて講演するようではまだ、鼻タレ小僧である。ライブラリーカフェに呼ばれてこそ福井の中で一廉の人間だと認められると言われているんですよ」と当時の館長が誇らしげに話していました。鯖江市は名取市とほぼ同一人口で維持され人気のあるまちで、隣の福井市との関係生はまさに、仙台市と名取市の関係にそっくりです。合併の選択をせず独立の自治体として生きる道を選択しています。そして、大都市にのみ込まれず「文化は鯖江にあり」市民の方々と図書館が協働によって作り上げています。

このほかに、長野県富士見町です。八ヶ岳のふもとのまちで、6割～7割の町民が山に住み、レタス栽培が有名な町です。高地に住んでいて仕事があり、中々図書館に足を運ぶことができない。そのような中、ふもとにある図書館に足を運ぶことができない地域住民、一方、何かの都合でふもとに行く住民が図書館に行くことができない人によって本を無料で運んであげる、無償のボランティア、「宅配サービス」をしています。多くの図書館でも、宅配サービスを行なっています。これは、多くの費用が発生し、全てを賄おうとすると税金がかかり、破綻します。多くの自治体で取り組んでいますが破綻し、その後の対応策として、障害者手帳を持っているなどの対象者を決めなければいけなくなります。富士見町は特にそのようなことを設けることなく、そして特に重要なのは、お年寄りだけでなく、交通手段がない人を対象としてお届けしますよとしています。

最後の事例として、これまでのサービスの生き継いだ先となりますが、香川県高松市の瀬戸内海沖にある男木島（おきじま）にある図書館です。この島は人口200人で、離島行政の中では非常に注目され、この2年間で10世帯増え増加率が一番多く、新しく若い人たちがあえて移り住んでいる島です。高松市から小さなフェリーで約30分かかる所です。この図書館は、私の友人でもありますが、夫がこの島の出身で、子どもを連れUターンでこの島に移り住んだことがきっかけでできました。子どものためには図書館が必要だと彼女は高松市に相談します。しかし、人口200人では図書館の分館を作るわけにはいかないと想定通りの回答がありました。このことから、荒屋の民家を買

取り改装し図書館にしました。それを呼び水に人口が増え、なんとこの島には今年4月からそれまでなかった学校が再開しました。この地域の子どもは小学校に通うのに30分ほどフェリーに乗っていました。このように大きく状況が変わってきています。

⑤今日からの進め方（ワークショップ）・はじめの一步

このように、市民協働の形は様々ありますが、あくまでも、これは他の取り組み事例でありますよと紹介です。大事なものは、名取市らしいやり方というのは何かを考えたいと思います。

- ▶目標：
 - ▶各活動団体の自主性を尊重しつつ、名取市全体で図書館と協働する市民活動の枠組み=プラットフォームとしての協働組織体（名称例：友の会、サポーター、フレンズ等）の形成を図る。
- ▶構成（2本×3回）
 - ▶#1「私たちの願望（ウィッシュ）を見つけよう」
 - ▶#2「私たちの願望（ウィッシュ）を持ち寄ろう」
 - ▶#3「私たちの願望（ウィッシュ）をわかち合おう」
 - ▶#4「私たちの願望（ウィッシュ）を形にしよう」
 - ▶#5「私たちの願望（ウィッシュ）を鍛えよう」
 - ▶#6「私たちの願望（ウィッシュ）を伝えよう」

先にゴールをお話ししますと、まさに協働です、対等性があります。このようなことを行うにあたり市の許可を得る話ではありません。皆さん自身が、何をやりたいのか、あるいは名取市、名取市図書館が何を必要としているのかを双方で持ち寄って折り合いをつける。良い悪いではありません。現実的にこれはできるかどうか、これは必要なかどうか、それはそもそも図書館でやるべきかどうか、それをまずは持ち寄ってみましょう。その新図書館に対して考えていくこととしたいと思います。

そして本日、10月、12月の3回の中で段々具体的な形にする中で、名取市らしいやり方はどういうことなのか、それを皆さんと2本ずつ、一緒に考えていきたいと思っています。例えば、お話し会をしてみたい、紙芝居の会をしてみたい。あるいは、今の図書館で行ってきたことを継続したい。同時に全く別な形で、駅前なので、朝市をしたい。でも大事なことはNO、NGではなく、本当にどうしたら、良い、住み続けたい、ご年配の方は、お子さんやお孫さんに帰って来いと誇らしく言えるまちをつくっていくきっかけになればと思います。

— 休憩の後、ワークショップに入ります —

3、ワークショップ

①本日の注意点・お願い

5つのテーブルに5人～6人に分かれての作業。各テーブルには、以下の方にメンバーとして加わっていただいております。

- ・新名取市建設検討委員⇒本日、参加者の意見を聴き緩やかに反映することをねらいとして、委員会を兼ねて参加の開催となります。
- ・若い世代⇒実際に活動するにあたり、これまでの事例では、活動期間が長くなるほど、若い人が入ってこない、持続しなくなるといった課題があること。この点を踏まえ、参加者の中で予め若い世代が固まらないようバランスよく入っていただいています。そこで、人生の先輩にお願いがあります。このワークショップをするにあたり、若い世代が、入りづらい環境を解消し、誰でも入りやすい環境を作る為をお願いしたいことがあります。若者の意見を尊重しなくても良いので、傾聴、耳を傾けることをお願いします。

それでは、皆さん自身が主体的に何をやりたいのか、共に考えて、市民の力でやろう。市民だけでできること、行政の力を借りて出来ること。役所がやるべきことと切り分けをしながら主体的に、自主的に今回は話し合いをしていただきます。

②各グループでの話し合い（グループワーク）

今回の各グループワークの内容・記録につきましては、まだ途中なので、3回目の活動後に報告とさせていただきます。ご了承ください。

進行：岡本真・鎌倉幸子アドバイザー

▶#0お互いを知る（自己紹介） 約10分

各グループ内で、1人1分程度自己紹介。

▶#1「私たちの願望（ウィッシュ）を見つけよう」 約20分

他のひとがどう思っているか気にせず、思っていることを言葉にしましょう。そして書いてみましょう。

⇒⇒付せんにキーワードを、それぞれ思うままに書きました。

⑦岡本真アドバイザーから、次のワンポイントアドバイス

- ・猫が飼えるといいなあ（餌代、世話は誰がするまでは考えず思うままに）

⇒自己犠牲はこの段階ではしないようにしましょう。

- ・これは市民協働かどうかを考えずに書いてみましょう。

- ・経験やスキルを活かして、わたしだったらこれができます。

⇒駐車場誘導係は私得意です。コーヒー入れるのがうまい。

⑧付せんに書いたことをワークシートに転記しましょう。

次回ミーティング時に忘れないよう、説明ができるようにメモもしておきましょう。自分の未来（来年・新館開館の時のふりかえり）のために記録しておきましょう。

▶#2「私たちの願望（ウィッシュ）を持ち寄ろう」 約30分

書いたことを他の人にも見せ合って、他の人の考えも知る。同時に私が考えていることをについてどんな風に考えているか聞いてみましょう。

それでは、付せんにも書いた自分の考えた意見を出しましょう。その時、同じ意見似ている意見が出た場合は、付せん・声（考え）を出しましょう。お互いを知ること大切に反応して出してみましょう。

⑦岡本真アドバイザーから、次のワンポイントアドバイス

・毎週毎週お花を持ってきてくれるボランティアをします。しかし、インフルエンザになった、高齢で続けるのが困難になった。とても、非常に良いことです。このことを継続するためにはどうしたらよいでしょう。仲間を見つけることです。他の人も賛成してもらえるのは、うれしいものです。

⑧グループワークまとめ：次回に向けて

（時間内での取り組みが行われている結果として）

・予習も視野に入れたグループワーク

例：本の紹介⇒お雛様・節分・七夕読書会などの開催

限られた資源（職員）で、行う場合は限界があります。解決策として、人件費投入することも解決策となります。しかし、現実的には困難なことから、例えば、七夕の飾りで使用する「笹」は私が準備しますといった解決策があります。ボランティア、市民ができることを話し合ってみてください。

③次回のワークショップについて

・12月2日（土）に発表が、グループできればと思います。

・今後の予定（10月15日（日）、12月2日（土））となります。2回目の会場は参加者が多くなりそうなので、個別に図書館から後日お知らせしますのでお集まりいただければと思います。

・残る2回のワークショップをぜひ参加してほしいこと、近所お友達をお誘い合わせの上の参加の呼びかけをお願いします。この時、若い世代、次世代の参加者の方がが必要です。事例としては、鯖江市、伊万里市などは幅広い年代の方がいたおかげで、継続して活動がされています。

ライブラリーミーティング終了後の委員による振り返り（検討委員会）

佐伯委員

自分だけではなかなか思いつかなかったが、他の人の意見があったことによって気づかされたことがあった。意見としては、ただ静かな図書館ではなくイベントが多い図書館がよい、高齢者になっても図書館へ行きたい、ボランティアとしてだけでなくどんな形でもよいので関わっていきたい、というものだった。

下澤委員

高校生がいたグループだったため、その高校生の意見を中心に進んだ。意見としては、自分のお気に入りのスペースを見つけカスタマイズしたい、図書館で会話したりゆっくりしたい、飲み物の持ち込みもできるといったものだった。

三塚委員

カフェがある、借りた本を入れるバッグを用意してほしい 季節ごとの行事の開催希望、お話し会、観葉植物 図書館にゆったりできる場所としての機能を求める意見が出された。

小木曾委員

小さい子から高齢者まで様々な世代が関わることのできる場所や、同じ本を読むこと等による交流を求めていると感じた。また、会費を集めて会報をつくるようになった場合のボランティアへの負担という心配があるといった意見が出された。

板橋委員

名取のことを知ることや展示のあり方、ミニコンサートや一日中滞在したい場所や食べるところがほしいといった意見が出された。

早川委員長

テーブルをまわった感想としては、1回目のワークショップでの到達点としては大成功だと思う。また形が見えていない中で中高校生を呼び込む難しさは課題である。中高校生は図書館の形が見えて活動が見えてくるといろいろな意見を言ってくれるのだが、いろいろな機会を捉えて若い世代を取り込むことができれば、新館オープンの機運がさらに盛り上がると思う。

小木曾委員

委員としての立ち位置は問題なかったか。

岡本アドバイザー

なかなか難しい立ち位置だったと思うが、全体的にととてもよかったと思う。

早川委員長

今回は、さらに市民協働組織化を見据えてワークショップを進めるとよい。

岡本アドバイザー

今回は、より具体的に市民協働という枠組みへ出てくる意見をどう落とし込んでいくかということが重要になる。参加者またはグループによっても、今回よりもいろいろな方向性の意見が出されるだろうが、ヒト、モノ、カネがどのように必要になってくるのかを考えていくことによって、協働における市との役割がクリアになると思う。

事務局

今回のライブラリーミーティングは検討委員会を兼ねてはいないので、委員みなさんに改めて通知することはない。また、今回に引き続き、次回も各グループ毎に1名の委員が入っていただきたい。